

41342

教科書文庫

4
810
31-1924
20000
26371

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

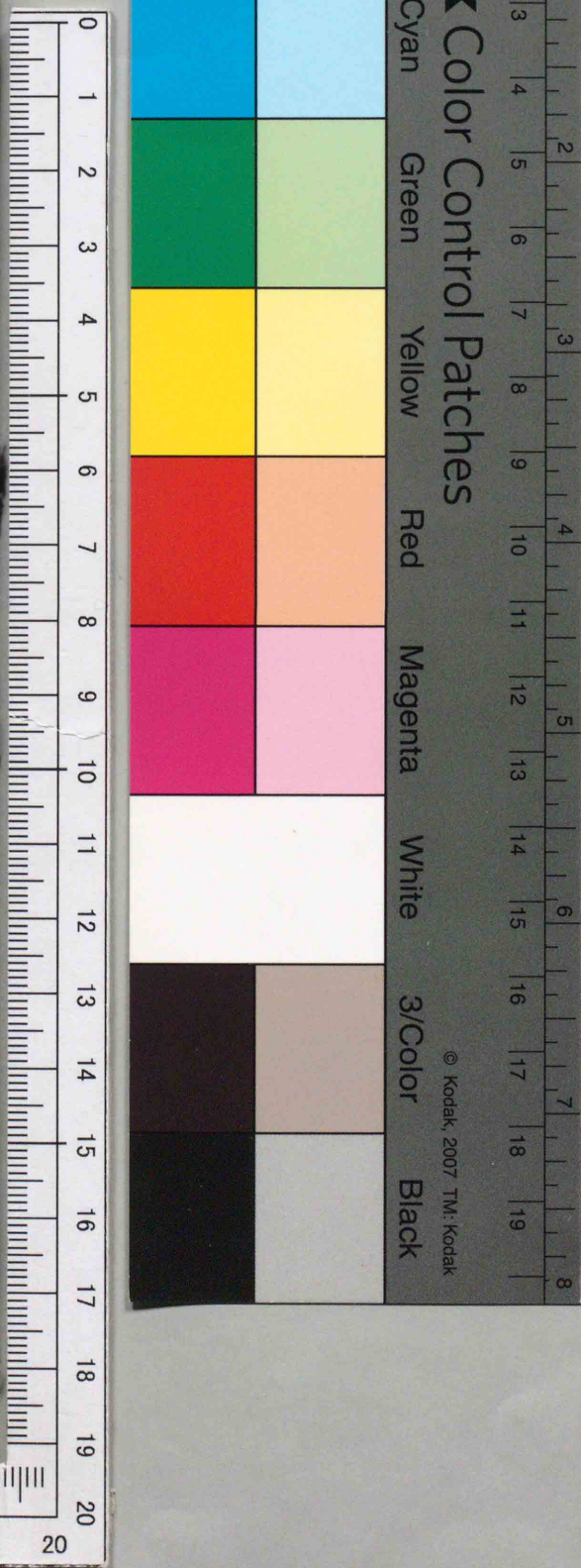


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



375.9  
Mo14  
資料室

尋常小學

國語讀本 卷八

文部省



資料室

396.7  
M04

尋常  
小學

國語讀本

卷八



文部省



東京大学図書印

もくろく

第十二	第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一							
手紙	大岡さばき	朝鮮人	炭焼	心と心	呉鳳	揚子江	三雀の子	二 十四歳の時が二度あるか	一 石合戦	武將の幼時	競馬	山の秋						
小ぞうから主人へ	子ども争	大岡さばき	朝鮮人	心と心	呉鳳	揚子江	三雀の子	二 十四歳の時が二度あるか	一 石合戦	武將の幼時	競馬	山の秋						
四十四	三十五	三十二	二十九	二十七	二十六	二十九	十六	十四	十三	五	三	一						
第二十八	第二十七	第二十六	第二十五	第二十四	第二十三	第二十二	第二十一	第二十	第十九	第十八	第十七	第十六	第十五	第十四	第十三			
乃木大将の幼年時代	人を招く手紙	分業	胃とからだ	廣瀬中佐	名古屋市	啞の學校	水の力	税	コロンブスの卵	三 ニューヨークから	二 シカゴから	一 サンフランシスコから	アメリカだより	塙保己一	看板	町の辻	餅つき	鷺
百十七	百三	百三	九十九	九十七	九十五	八十三	八十一	七十七	七十五	七十	六十九	六十四	六十二	五十八	五十五	五十五	五十七	四十七



國八

第一 山の秋

當 櫻

秋は山が美しい。此の間二三度降つた雨に、山の木の葉は目立つて色づいた。黄色なのはな  
らやくぬぎで、赤いのはかへでや櫻やぬるで  
である。林の中へはいると、眞赤になつたつた  
が、松の木にからまつてをり、日當りのよい所  
には、つるうめもどきが美しい實をならべて  
ゐる。

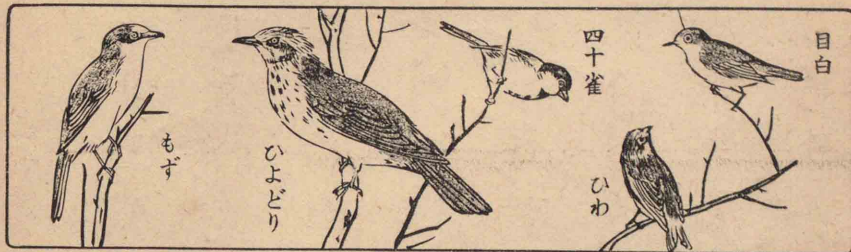
四十雀から目白ひよどりもずひわ、秋の山は小鳥

第一 山の秋

一



清水



の聲でにぎやかである。谷間の水はすきとほるやうにすんでゐる。小鳥は時々此の清水にのどをうるほしては、こずゑでさへづるのである。栗のいがのゑむのも今である。きのこのむらがつて出るのも、しひの實



焼炭

が落ちて、くぼたまりにころがり合ふのも今である。炭を焼く煙も所々に立ちはじめた。うさぎの毛も間もなく白くなるだらう。



第二 犬ころ

庭のすみで、先程からちやらくとすゞの音が聞える。しやうじを明けて見ると、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれて



ゐる。あまりかはいらしいので、僕はしばらく  
それを見てゐた。すると其のうちに、僕の見て  
ゐるのに気がついたと見えて、じやれ合ふの  
を止めて、尾をふりながら、ちよこくくやつて  
来た。

僕が庭へ下りて、かはるぐ頭をなでてやる  
と、喜んで僕の手にとびついて、ぺろくとな  
める。

僕がえんがはへ机を持出して、おさらひをは

氏

じめると、二匹ともくつぬぎに手をついて、ぎ  
やうぎよく僕のすることを見てゐる。  
ふと、垣根の外でちやらくとすゞの音が聞  
えた。二匹はいちもくさんにかけて行つたが、  
間もなくかはいらしいのを一匹つれて来た。  
仲間がふえたので、又一しきりじやれ合ひを  
はじめた。

第三 競馬

昔或氏神のお祭に、競馬くらうまの神事といふ事があ



社競走

つた。それは氏子の五箇村から、子どももの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させて、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

選頭

或年選ばれた子どもの中に、すぐれて上手なものゝ二人あつた。一人は信作、一人は耕造といつて、年は同じく十五歳。今年の競馬はさぞ見ものだらう。といつて、祭の當日には、おびた

境内

だしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。やがて五人の騎手は多くの人々につきそはれ、しづくくと馬を歩ませて、鳥居の中に集つて來た。

度

神主は先づ神前で祝詞のりとを上げて、それがすむと、支度だいこといふあひづの一番太鼓を鳴らした。五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。五箇村の人々は各自分の村の騎手に向つて、ぜい勝つてくれ。負

各



けたら村のはぢになるぞ。しつかりやつてくれ。などと、口々に勢をつけてゐる。

二番太鼓の並べのあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。馬の頭をそろへて、三番太鼓を今やおそしと待ちかまへてゐる。

三番太鼓が鳴るが早いか、五匹の馬は一さん  
につけ出した。始の間はあまり甲乙はなかつたが、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞ

連

始  
甲乙  
後

點(点)

いて三騎までも後れて、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。さうしてそれが同時に決勝點へ着いた。二人を出した村の者は、たがひに勝利をいひはるので、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。

今度の競走も五分々々に進んで行つたが、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。信作はつるりとすべり落ちて、其のはずみに、ころくと池の中へころげこんだ。



しかも其所は深い所である。

耕造は驚いて、ひらりと馬からとび下り、一たん沈んで又浮上つた信作のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引上げた。つきそひの者や見物人はかけよ



醫

如何

つて来て、信作に水をはかせるやら、醫者を呼びに走るやら、上を下へのさわぎである。

耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、  
「感心だ、感心だ。えらい子だ。信作が落ちたのにかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、人の命にはかへられないと思つて、手を助けてやつたのはえらい。如何にも見上げた心掛だ。相手の信作があを通りだから、いづれ又改めてやり直しをしてもらは



なければなるまい。」

などといった。信作方の人々は之を聞いて、

「もう改めて勝負をするには及びません。あ

なた方の村が勝つたのです。耕造さんのお

かげで、信作の命が助かりました。耕造さん

の心掛は實に見上げたものです。どうか今

日から一年の間、あなた方の村が五箇村の

頭になつて下さい。」

といつたので、さうきまつたといふことであ

る。

### 第四 武將の幼時

#### 一 石合戦

徳川家康が幼時家來に負はれて、安倍川原へ

石合戦を見に行つた。一方は百四五十人で、他

の一方は三百人以上もあつた。見物人は争つ

て、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行

けと命じた。家來があやしんで、其のわけをた

づねると、

幼 負 | 争 | 多



始

「多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」

といつた。間もなく合戦が始ると、果して小勢の方が勝つた。後に此の話を聞いた者は、皆家康の年に似合はずかしこいのに驚いた。

二 十四歳の時が二度あるか

徳川家康が大阪城を攻めた時、其の子頼宣よりのぶは戦が始つたと聞いて、先陣へかけつけたが、も

う間に合はなかつた。くやし泣きに泣くと、そばに居た松平正綱まさつなが

「殿はまだお若くて、これから功名をお立てになる折はいくらもございます。」

といつてなぐさめると、頼宣は顔色をかへて、「やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。」

といつた。家康は之を聞いて、「今の一言は、先陣の功名にもまさる。」といつて喜んだ。



三 雀の子

松平正綱の子信綱は幼名を長四郎といつた。九つの時から將軍の若君竹千代のおつきになつた。長四郎が十一歳の時のことである。竹千代が軒ばに雀の巢を見つけて、

「長四郎、雀の子を取つて參れ。」

と命じた。

日が暮れてから、長四郎がそつと屋根づたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうと

雀巢 暮 届

した時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。將軍秀忠ひでたけが刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。

「何しに此所へ參つた。」

「雀の子がほしくて參りました。」

「誰に頼まれた。」

「誰にも頼まれは致しません。」

「いや、きつと頼まれたであらう。」

「いゝえ、頼まれたのではございません。」



袋 柱

將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、  
 「ありのまゝに申すまでは出さぬ。」  
 といつて、袋の口を封じて柱に掛けた。  
 翌日になつて、將軍が又たづねたが、始のやう  
 に答へた。晝頃、御臺所のおわびによつて、長四  
 郎はやつと袋から出された。  
 將軍はあとで、御臺所に、  
 「長四郎があゝの心で大きくなつたら、竹千代  
 には無二の忠臣であらう。」

河 最 端 至

材 出

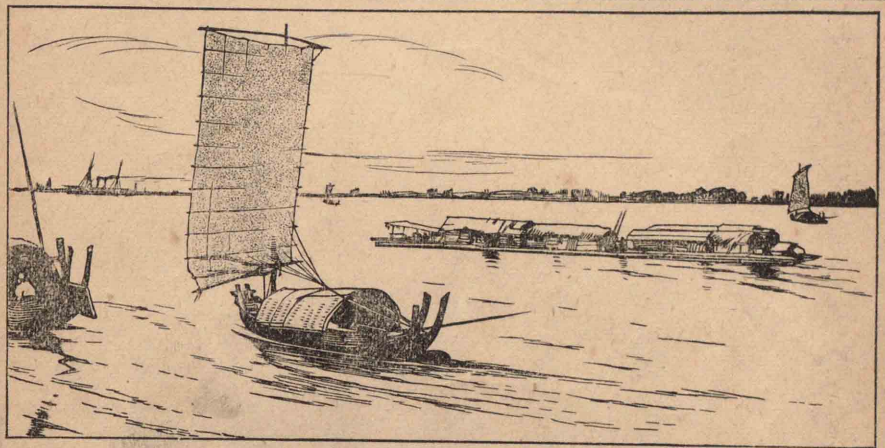
といつたといふことである。

第五 揚子江

揚子江ヤウスカウハ支那第一ノ大河ニシテ、其ノ長サ一  
 千三百里、我が國ノ最南端ヨリ最北端ニ至ル  
 長サヨリモ長シ。我が國第一ノ長流鴨綠江アクリダノ  
 如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザルナリ。汽船  
 ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ  
 九百里サカノボルコトヲ得。  
 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲ



野菜



イカダニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作り、又小屋ヲ建テテ豚、雞等ヲカヒ、一家コトゴトクコレニ乘リテ、流ニシタガヒテ下ル。其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ル。

量豐夏増濁

域綿沿

マデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。

揚子江ハ水量ツネニ豊ニシテ、洋々ト流ルレドモ、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。揚子江ノ大ナルコトコレニテモ知ルベシ。

揚子江ノ流域ハ地味スコブルコエ、米、茶、綿等ノ産物多シ。又沿岸ニハ上海、漢口等アリテ、我

シヤンハイカンコウ



盛

ガ國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

第六 吳鳳

臺灣 供

臺灣の蕃人ばんじんには、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、阿里山ありさんの蕃人にだけは、此の悪い風が早くから止みました。これは吳鳳ごほうといふ人のおかげだと申します。

吳鳳は今から二百年程前の人で、阿里山の役人でした。たいそう蕃人をかはいがりましたので、蕃人からは親のやうにしたはれました。

許

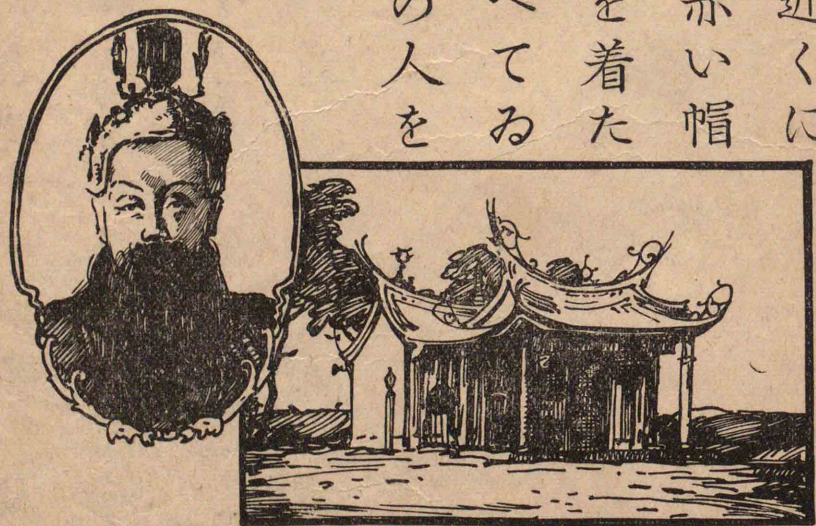
吳鳳は役人になつた時から、どうかして首取の悪風を止めさせたいものだと思ひました。ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、それをしまつて置かせて、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

四十餘年はいつの間にか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。そこで蕃人どもが吳鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ま



した。吳鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくな  
 いといふことを説聞かせて、もう一年、もう一  
 年とのばさせてゐましたが、四年目になると、  
 「もう、どうしても待つてゐられません。」  
 といつて來ました。吳鳳は  
 「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽  
 子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る  
 者の首を取れ。」  
 といひました。

翌日蕃人どもが、役所の近くに  
 集つてゐますと、果して赤い帽  
 子をかぶつて、赤い着物を着た  
 人が來ました。待ちかまへてゐ  
 た蕃人どもは、すぐに其の人を  
 殺して、首を取りました。  
 見ると、それは吳鳳の首  
 でございました。蕃人ど  
 もは聲を上げて泣きま





した。  
 さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつつて、其の前  
 で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひ  
 ました。さうして今も其の通りにしてゐるの  
 だといひます。

第七 心と心

軒下にはらばへる黒き犬、  
 にくらしき黒と思へば、  
 黒もまた、意地悪き人と見るらん。

握

はをむきて、うゝとうなりて、

垣を出て行く。

えんがはにうづくまる三毛のねこ、

愛らしき三毛と思へば、

三毛もまた、したはしき人と見るらん。

尾を立てて、のどを鳴らして、

我にすりよる。

第八 手の働

取る・拾ふ・握る・持つなどは皆手の働なり。もし



箸 結

手なくば、我等は如何に不自由ならん。箸を持つことも出来ず、帯を結ぶことも出来ず、かゆき所をかくことも出来ず、いたき所をさすることとも出来ざるべし。

塗 畑 耕

大工の家を建て、左官の壁を塗り、船頭の舟をこぎ、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。又筆一本にて美しき繪をゑがき、のみ一ちやうにて見事なるほり物をほりて、人を感じせしむるも、手の働なり。

手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

第九 炭 焼

太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。或日炭を焼く男が太郎のうちへ来て、ゐりのはたでいろいろの話をした。此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はてい



ねいに教へてくれた。

炭を焼くかまを造るには、はじめ石と土とでかまの腰だけをきづいて、天井てんじやうは造らずにおく。腰といふのは、かまのまはりのことである。其の大きさは大ていさしわたし八九尺、高さ五尺ぐらゐで、前の方には、たて四尺四五寸、よこ一尺二三寸のかま口を造り、後の方には煙出の口を明ける。

さて山の木をきり倒して、五尺ぐらゐの長さ

にきりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べる。それから其の上にそだを中高につみかさね、又其の上にねつた土を置いて打固めると、天井が出来る。次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木を焼く。さうして煙の色で焼け加減を見て、かまの外にかき出し、しめつた灰をかけてけすと、かた炭が出来上る。かまは一度造つておけば、其の後いく度も使へるのである。

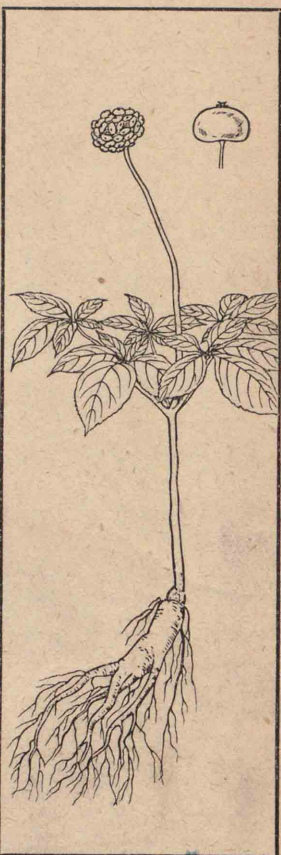


炭にはかた炭の外に土がまといふものがある。これは土ばかりで造つたかまの中で焼き、火がきえてから取出したものである。

第十 朝鮮人蔘

山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、其の中貴重なものの一つは朝鮮人蔘にんじんです。これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたへてゐます。さうして其

草 藥 貴 重 朝 鮮 栽 培



の栽培につ  
いては次の  
やうな話も

あります。

昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。すると或夜ゆめの中に、明日何山の何所へ行けば、望のものをさづけてやるといふ神様のお告がありました。婦人は大いに喜んで、

婦

告



違  
育

夜の明けけるのを待つて、すぐに其の山へ上り  
ました。さうして教へられた場所へ行つて見  
ますと、望の赤子は居ませんでしたが、見なれ  
ない草に、真赤な美しい實が一つなつてゐま  
した。婦人は、これは珍しい、神様がおさづけ下  
さつたのはこれに違ひないと思つて、其の實  
を取つて来て、庭先の畠の中にまきました。間  
もなくそれから芽が出ましたので、婦人は之  
を我が子のやうに育てました。これが人蔘で、

乳 返 奉 訴

此の婦人は長生をしましたが、一生の間仕合  
はせのよい事がつゞいたと申します。

第十一 大岡さばき

一 子ども争

昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子に  
やつて奉公に出ました。幾年かの後、里子を返  
してもらはうとすると、先方はあづかつたお  
ぼえがないといつて返しません。困つて町奉  
行へ訴へて出ました。



調母

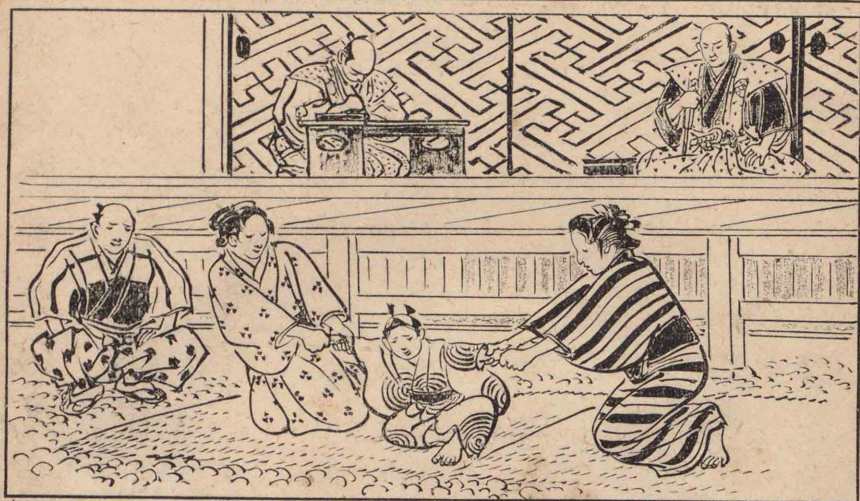
時の町奉行は名高い大岡越前守あちせんのかみで、一人の子どもに二人の實母はないはずといつて、いろいろ調べますが、どちらにも實母だといひはります。越前守はじつと考へましたが、

「其の子を二人の真中に置いて、両方から子どもの手を取つて引合へ。勝つた方へ其の子を渡す。」

といひました。二人の女は

「かしこまりました。」

放



と、両方から引合ひました。が、子どもがいたがつて、わつと泣出しますと、實母の方は驚いて手を放しました。里親の方は「それ見よ」といはぬばかりに、子どもを引きよせますと、越前守は聲をかけて、

「これ女、其の手を放せ。泣



情

くのもかまはず力まかせに引くとは、情を知らぬ不届者。手を放した女が實母にきまつた。

と申し渡ししましたので、里親は恐れ入つたといひます。

二 石地藏

呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして休みましたが、餘程つかれてゐたものと見えて、何時の間にか、ぐつす

呉

包  
木綿

りねこんでしまひました。

目をさまして見ると、ふろしきづつみがありません。包の中には白木綿が五十反ばかりはいつてゐたのでございます。驚いてあたりをさがしても見當らず、近所の人にきいても知らぬ知らぬと申します。困つて町奉行へ訴へて出ました。

越前守は手代の言ふ所を聞いて、

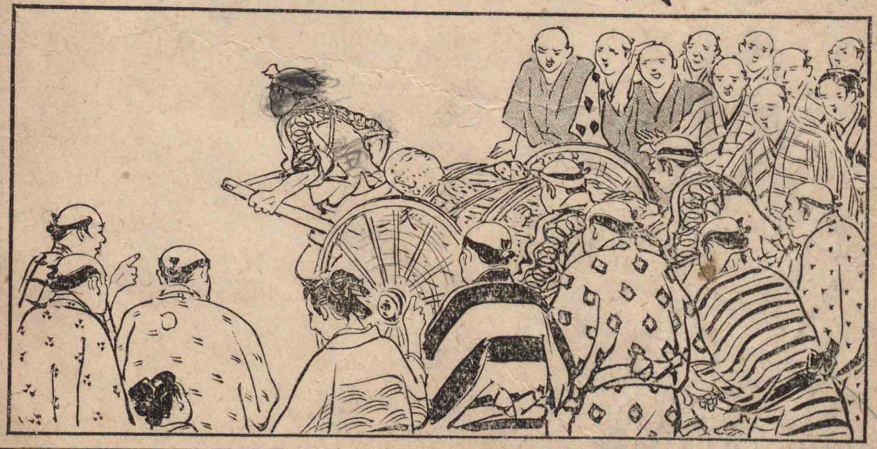
「其の方の申す所では、どうやら其の地藏が



積荒

うたがはしい。召しとつて  
 ぎんみをしよう。  
 といつて、下役の者に石地藏  
 をしばつて来るやうに命じ  
 ました。下役の者が石地藏に  
 荒縄を掛けて、車に積んで参  
 ります。物見高いは江戸のく  
 せて、

「何だ、何だ。」



早速

亂(乱)

「地藏様が繩にかゝつていらつしやる。」  
 「これは珍しい。地藏様でも悪いことをなさ  
 つたと見える。」  
 などといつて、四五百人のものが、ぞろぞろと  
 車の後について、思はず知らず役所の門内へ  
 入りこみました。  
 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の  
 所名前を書取らせ、さておごそかに、  
 「此所は天下の役所なるに、許しもなくして亂



成

入するとは不届しごく。もはや歸すことは相成らぬ。」

と申し渡しました。一同は驚いて、泣くやらなげくやら、大さわぎでございます。しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろくおわびを致しますと、越前守は

「しからは許してつかはすであらうが、其の代りと致して、白木綿を一反づつ、名札をつけて、三日の間に間違なく持參致せ。」

持 札

盜

と命じました。

三日の間に一同は白木綿を一反づつ持つて參りました。越前守は呉服屋の手代を呼出して、其の中に盜まれた品のありなしを調べさせました。すると其の中に二反ありました。そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、とうとう罪人がわかりました。

罪 再 納

越前守は再び一同を呼出して、さきに納めさ



せた白木綿を返し、ついでに石地藏を、もとの所へもどしたと申します。

第十二 手紙

一 小ぞうから主人へ

謹んで申し上げます。取分けおいそがしい中を、一週間もおひまをいただきまして、まことにありがとうございます存じます。病中の祖母も大そう喜びまして、ありがた涙をこぼして居りま

祖 週 謹

熱 食

願 御

す。始は熱が高くて心配致しましたが、昨朝あたりから熱が下つて、食事にも進むやうになりましたので、やつと安心致しました。しかし醫者の申す所では、老體のこと故、餘程大事にしなければならぬとのことでございます。ますますことに勝手がましい御願でございますが、もう四五日の所おひまを願ひたうございます。



十二月十四日

浅吉

御主人様

二 主人から小ぞうへ

其の後どうかと案じておりましたが、手紙を見て安心しました。こちらの方はどうしてもなるから、心配するに及びません。祖母一人孫一人の事だから、五日でも十日でも、一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病して

看 寝

爲替

好

止 飼王鳥

お上げなさい。此の爲替はほんのわづかですが、何か好きな物を買つて上げて下さい。

十二月十六日

村尾甲藏

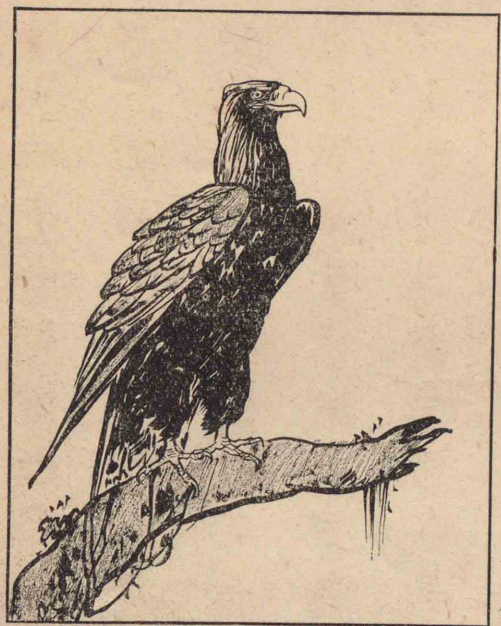
浅吉殿

第十三 鷺

大キサカライツテモ、強サカライツテモ、鷺ハ  
タシカニ鳥類ノ王デアアル。金アミノ中ニ飼ハ  
レテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、



曲 爪 在



怒ツテキル肩、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、  
スルドクテ落着イテキル目、トガツテカギノ  
如クニ見エル爪、コゲ茶色ノ羽、アクマデモガ  
ンジヨウナツバサ尾、何所ニ一分ノスキモナ  
ク、強ミガ全身ニミチ  
ミチテキル。マシテ自  
由ノ天地ニ居テ、自在  
ニ空ヲトブ様ハ、實ニ  
勇マシイモノデアル。

空 求 彼 深

スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分  
ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。サ  
ウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、スウ  
ツト下リテ來テ、急ニツバサヲチゞメ、風ヲ切  
ツテマツシクラニエモノノ上ニツカミカ、  
ル。狐<sup>キネタキ</sup>狸<sup>キネ</sup>兔<sup>ウサギ</sup>犬<sup>イヌ</sup>豚<sup>ブタ</sup>ナドハ彼ノ求メル物デアルガ、  
マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツ  
テ行クコトモアル。

鷲ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。巢ハ至



絶壁

初 最 畜 餅 釜

ツテソマツナモノデ、人ノヨリツケナイ絶壁ノ間ヤ老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアアル。春ノ初二二三ノ卵ヲ産ミ、五週間程アタ、メテ、ヒナニカヘス。ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアアル。

第十四 餅つき

餅をつく音に目がさめた。はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろうから

粉

奥

は、盛にゆげが上つてゐた。おかあさんは取粉をのし板の上にはひろげて、餅のつき上るのを待つていらつしやる。おとうさんはきね、おばあさんはこねどり。おぢいさんは大釜の火をたいていらつしやる。にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへてゐた。

「お早う。といふと、



「よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。」

と、にいさんがいつた。

つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそなへになつた。

二臼目で小さなおそなへが幾かさねか出来、

臼

三臼目からは、のし餅が出来た。四臼目の時は、おぢいさんも手つだつてつかれた。

二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。其の時にいさんが

「私にもつかせてみて下さい。」

といひ出すと、おぢいさんが

「とてもまだ。」

とおつしやつたが、おばあさんは「まあ、ついてみるがよい。」



とおつしやつた。

いよくにいさんがつき出した。始のうちは勢がよかつたが、間もなく腰がふらつき出して、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。おとうさんが

「せいは高くても、まだだめだ。」

とおつしやつたが、それでもとうく一白だけはつき上げた。

八時頃には、すっかりすんだ。おしまひの一白

小豆

配

杖 婆

には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、近所へも配つた。

第十五 町の辻

雪どけ道のぬかるみを

杖にすがりてとぼくと、

歩み來れる老婆あり。

ゆききの車馬のたえざれば、

向ふの側かはへ行きかねつ。

老婆の前を右左、



行きかふ男女多けれど、  
 北風寒き町の辻、  
 身なりいやしき老婆には、  
 手をかす人もあらざりき。  
 米屋の小ぞうお得意へ  
 米を運びし歸り途、  
 ひらりと下りて自轉車を  
 角の下駄屋にあづけ置き、  
 すぐに老婆をみちびきぬ。

「年の若きに感心な。  
 かくいふ聲を後にして、  
 小ぞうは乗りぬ、自轉車に。  
 國に母をや残すらん、  
 彼のまぶたにつゆありき。」  
 下駄買ふ人も、賣る人も、  
 下駄屋にありし人は皆、  
 彼の姿を見送りぬ、  
 さとすべき子にさとされし



小きき悔をいだきつゝ。

第十六 看板

悔 帳墨履 職號(号) 活

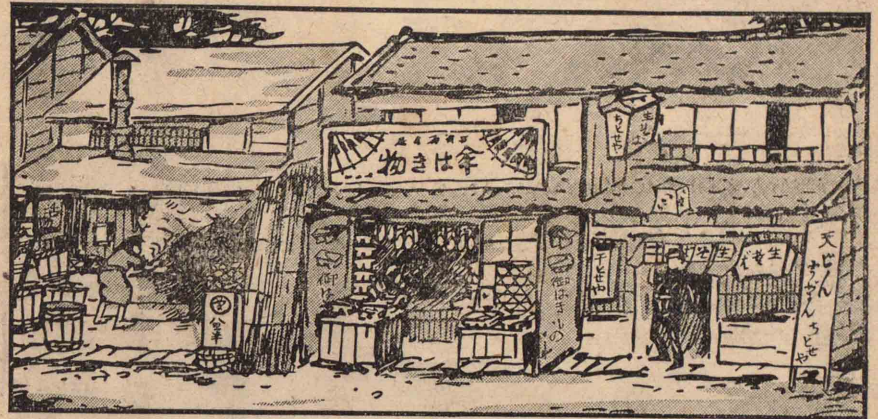
學校用具ヲ賣ル店ニ、手帳筆墨繪具ナドト記シタル看板ヲ出シ、ハキ物屋ニ下駄草履傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、ヨク人ノ知ル所ナルベシ。スベテ看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。近年人々ノ生活次第ニイソガシクナリテ、見

古 用 彼

物人ノ外ハ、町ノ兩側<sup>ガ</sup>ヲナガメテ、ユル／＼歩クガ如キ者ナシ。ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キソヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、生拵<sup>キソバ</sup>、うどん<sup>ウドン</sup>、志るお<sup>シルコ</sup>、壽し<sup>スシ</sup>、惣<sup>ソウ</sup>、魚<sup>イサ</sup>、以<sup>イ</sup>、(センベイ)ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。又マレニハナゾヲ用フルモアリ。彼ノ燒<sup>イモ</sup>、諸屋ノ看板ニ、八里半ト記セル

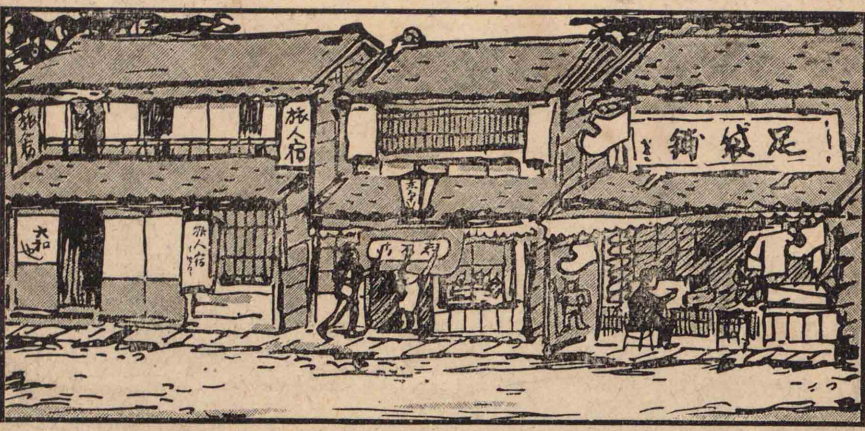


味 足袋



モノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

看板ニハマタ商品ヲエガキタルモノアリ。洋物屋ノ看板ニ、シヤツ襟襟飾ノ類ヲエガキ、金物屋ノ看板ニ、鍋釜庖丁ヲエガクノ類ナリ。又足袋屋蠟燭屋時計屋扇屋櫛屋等ニ



ハ、商品ヲ大キクセル模型ヲカ、グル風アリ。

此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、芝居又ハ活動寫真ナドノ興行場ニハ、繪看板アリ、寫真屋ニハ、寫真ノ看板モアリテ、看板ノ種類ハキハメテ多シ。



第十七 塙保己一

目は見ゆれども、字のよめざる人をあきめく  
らといふ。昔はあきめくからも多かりしに、まこ  
とのめくらにして、大學者となりし人あり。塙  
保己一ほきいちこれなり。

保己一は五歳の時めくらとなりしが、人に書  
物をよませて、一心に之を聞き、後には名高き  
學者となりて、多くの書物をあらはせり。

保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町

國八



にありて、多くの弟子保己一につきて學びた

れば、時の人

番町で目あきめくらに  
道をき。

と言ひたりといふ。

或夜弟子をあつめて、書物  
を教へし時、風にはかに吹  
きて、ともし火きえたり。保  
己一はそれとも知らず、話



をつづけたれば、弟子どもは

「先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」

と言ひしに、保己一は笑ひて、

「さてく、目あきといふものは不自由なものだ。」

と言ひたりとぞ。

第十八 アメリカだより

一 サンフランシスコから

ハワイから出した繪葉書は見ましたらうね。おとうさんは一昨日の正午無事にサンフランシスコへ着きました。横濱を出てから、ちやうど十五日目です。

サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろくいな商賣をしておます。おとうさんが着いた日は、ちやうど五月のお節供せちくの日で、日本人



の家には、鯉のぼりが立つてゐました。

此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、今では前よりもかへつてりつぱになつてゐます。アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。

サンフランシスコはカリフォルニヤ

肥 富 有

州にあるのですが、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。ことに野菜や果物くだものが有名です。日本人は八





萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。つまりお前たちよりもよけいに勉強してゐるわけですよ。お前たちもせい／＼勉強なさい。

五月七日

父から

太郎どの

さち子どの

ニ シカゴ

から

サンフランシ

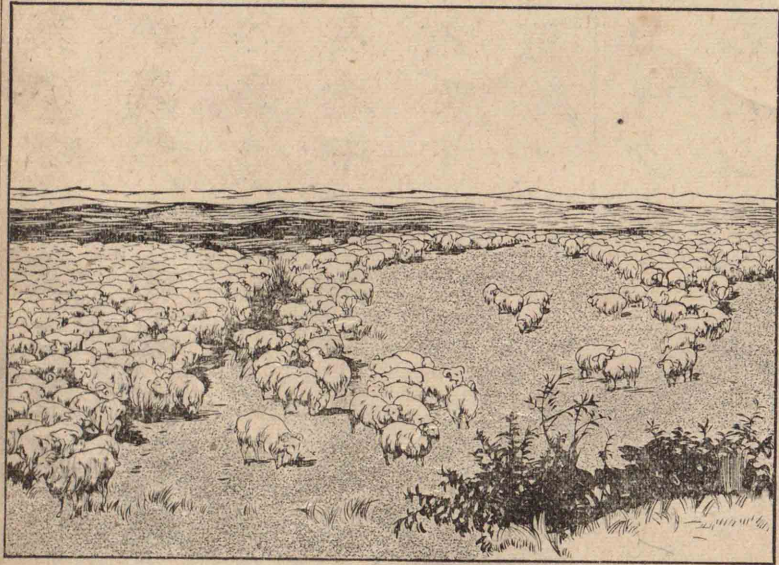
スコから三日

二晩汽車に乗

通して、今日此

のシカゴに着

きました。此所





園健康害 牧 米 滯

は工業地で、煙突の煙で空は真黒だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなささうです。此の繪葉書は此所へ来る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。

九月五日

三 ニューヨークから

長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、今日いよく米國第一の大都會

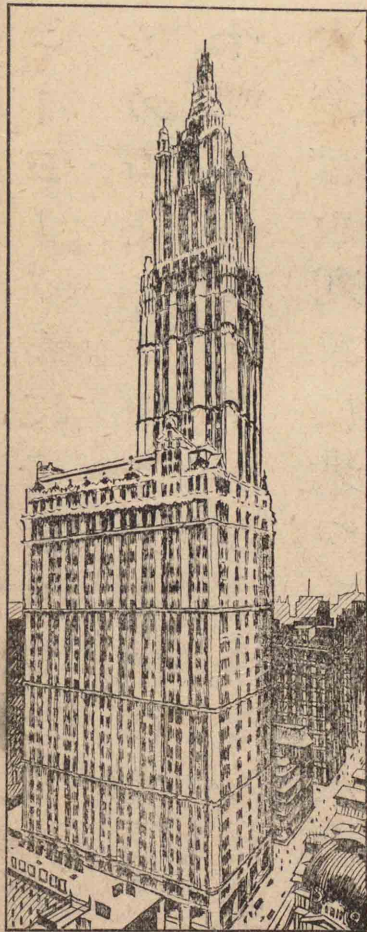
哩

ニューヨーク市に着きました。シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますがおとうさんは最大急行の列車に乗つて、たつた十八時間で着きました。日本にはまだこんな早い汽車はありません。ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上もあるといひます。高い建物のあるこ



終 勿論

とは世界第一で、十階二十階の家はいくらもあります。中で最も高いのは五十五階もあります。地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終



始

夜、休なしに運轉してゐます。アメリカ人は大きいこと、廣いこと、高いこと、早いこと、何でも世界第一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。此所は有名な商業地ですが、りつばな學校もありますし、博物館や圖書館などもたくさんあります。シカゴを立つ日にお前たちの年始



状が着きました。二人とも字が上手になつたのに驚きました。うちには何事もないさうで安心しました。其のうち、繪葉書や寫真帖を送りますから、ゆつくりごらん。おかあさんによろしく。

一月十八日

父から

太郎どの

さち子どの

第十九 コロンブスの卵

コロンブスがアメリカを發見して歸つた時、イスパニヤ人の喜んだことは非常なものでした。

一日祝賀會の席上で、人々がかはるぐ立つて、コロンブスの成功を祝しますと、一人の男が

「大洋を西へくと航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。」



卓 冷笑

といつて冷笑しました。

之を聞いたコロンブスは、つと立つて、食卓の上のうで卵を取り、

「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんなさい。」

といひました。人々は何の爲にこんなことをいひ出したかと思ひながら、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。

此の時コロンブスは、こつんと卵のはしを食

卓にうちつけ、何の苦もなく立てて申しました。

「諸君、これも人のした後では、何のぎうきもない事でございませう。」

第二十 税

「おとうさん、此の雪降りに、何所へお出でになりますか。」

「役場へ税を納めに。」

「明日にでもなつて、雪がはれてからではいけ

税



是 限

「ませんか。」

「是非今日のうちに納めなければなりません。此の切符きっぷに、一月二十日限り當役場へ納付なふとありませう。今日までに納めないと、役場によけいな手数をかけることになります。」

「今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」

「さうです。三枚とも切符です。」

「それをみんなうちで納めるのですか。」

費 縣 院 路 裁判

「さうです。此の一枚には徵税ちぎ令書れいとありません。これは村の税で、村の學校や役場の費用などになるのです。」

「あとの二枚は。」

「一枚は縣の税で、一枚は國の税です。ごらん、これには徵税てん傳令書でんとありません。これは縣の税で、縣立の學校や病院や、其他道路などの費用になります。それからこれは國の税で、納税告知書としてあります。軍隊や、裁判所や、外



民務

國とのつきあひや、其の他いろくくの費用に  
なるのです。國の税は勿論、縣の税も村の税も  
みんな大事なもので、之を納めることは國民  
の務です。」  
 「縣や國の税も、村の役場へ納めれば、よいので  
すか。」  
 「さうです。村役場で、村内の家々から納めるの  
をまとめて、それぐへ送るのです。」  
 「どのうちでも、納める金高は同じですか。」

財收少

治御器

歌

「いや、それは財産や収入の多少によつて違ひ  
ます。くはしいことは又學校で習ふでせう。雪  
も小降りになつた。役場のひけないうちに行  
つて來よう。」

第二十一 水の力

明治天皇の御製に、

器にはしたがひながら、いはがねも  
とほすは水の力なりけり。  
といふ御歌がある。



圓(円)

加

水にはこれといふ形がない。いれ物次第で、圓くもなれば、四角にもなる。それでは弱いものかといふに、さうではない。落ちる時の勢が加はると、長い間には、思ひの外の事をする。雨だれでも石をうがつ。長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をする。彼の水力電氣の如きはそれで、電燈・電車等に用ひる電氣も、もとをたゞせば水のカである。

第二十二 啞の學校

もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、昨日の朝三年ぶりてハワイから歸つて來た。信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、生れつき啞おしなので、僕のうちで世話して、啞の學校に入れてある。信吉は僕の兩親に歸つて來たあいさつをすますと、

「奥様、あのとよは。」

と、さも心配さうにたづねた。母が



「とよちゃんかね。丈夫であるよ。」  
といふと、信吉はほつと息をついて、  
「ありがたうございます。それをお聞きして  
安心致しました。あちらでも、あの子のこと  
ばかりが、氣にかゝつてゐたのでございま  
した。それではちよつと行つて参ります。」  
といつて、すぐ出かけようとした。父は  
「相かはらずせつかちだね。」  
といつたが、別に止めようともせず、僕に、

「お前も一しよに行つてお出で。」  
といつた。僕ははかまを着けて、信吉と一しよ  
に出かけた。  
學校へ行つて案内をこふと、小使が出て來た。  
「私はこちらに御やくかいになつてゐる松  
木とよの父でございます。ちよつととよに  
あひたくて参りました。」  
といふ間も、信吉はのび上るやうにして奥の  
方を見た。小使は僕等を應接室へ通して出て



行つたが、間もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。生徒はおとよであつた。おとよは信吉の顔を見ると、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。信吉は

「おう、おとよ。」

といつて、娘の手をはなして、頭の先から足の爪先までながめたが、しばらくして、

「おとよ、大きくなつたなあ。わしはあちらに

居ても、お前の事はかり心配してゐた。」  
といつて、今度は先生に向つて、

「あゝ、あなたが先生でいらつしやいますか。娘が大そうお世話様になります。私は三年ぶりに此の子にあふのでございますが、何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出來ないのでございませう。」

といふと、先生はおとよに、低い聲できかれた。



「此の方はどなたですか。」  
するとおとよは、にごつた聲で、ゆつくりと、  
「わたくしのおとうさん。」  
と答へた。

信吉はびつくりして、二足三足後へ下つたが、  
「や、口をきいたぞ。おとよ、お前はものが言へ  
るやうになつたのか。ありがたい。もう一つ  
何とか言つておくれ。」  
といつて、娘を引きよせて、

「先生、どうして口がきけたんでせう。ほんた  
うにふしぎなことだ。」  
「いや、今では教育のおかげで啞でもものが  
言へるのです。」  
それはありがたい。おとよ、わしの言つてる  
ことがわかるか。わしの聲が聞えるか。聞え  
るなら、もう一つ何か言つておくれ。」  
先生はにこくして、  
「いや、聲が聞えるのではありません。口の動



き方を見てさとするのです。」

信吉はまだ先生の言はれたことがわからなかつたと見えて、娘の耳に口をよせて、

「おとよ、おとうさんが歸つて来て、うれしいか。」

と大きな聲で言つたが、おとよは何も言はないうで、信吉の顔を見てゐる。先生は

「あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。よく見えるや

うにして、もう一度しづかに言つてごらんなさい。」

と言はれた。信吉は少しはなれて、今度はおとよの顔を見ながら、

「おとよ、おとうさんが歸つて、うれしいか。」

と言つた。おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、

「はい、うれしうございます。もう何所へも行つて下さいますな。」



とはつきり答へた。信吉は

「もうく何所へも行きはしない。」

といつて、大きな涙をぽたく落した。

先生はいろくな事を信吉に話して聞かされた。おとよは話し方ばかりでなく、書き方も算術も裁縫も料理も習つてゐる、大そりりこりだから、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。げんに此の學校の卒業生で、商店の番

頭になつてゐる者もあれば、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。信吉はとりのぼせたやうにうれしがつて、娘の顔と先生の顔を、かはりばんこに見てゐた。

それから先生は、僕等を一年生の教室に連れて行かれた。此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。いをうと間違へたり、うをえと間違へたりするのを、先生は根氣よく、何度もく教へてゐられた。信吉は教



室を出ると、

「先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。どうも恐れ入つたことだ。」

と、いつて、先生を廊下ろうかでをがむやうにした。先生は

「何なら、あのお子を今日一日お連れになつてもようございます。」

といはれた。信吉は

「いや、何、それには及びません。」

といつたが、すぐ

「では、一日お借り申します。近所の者に見せてやりたい。」

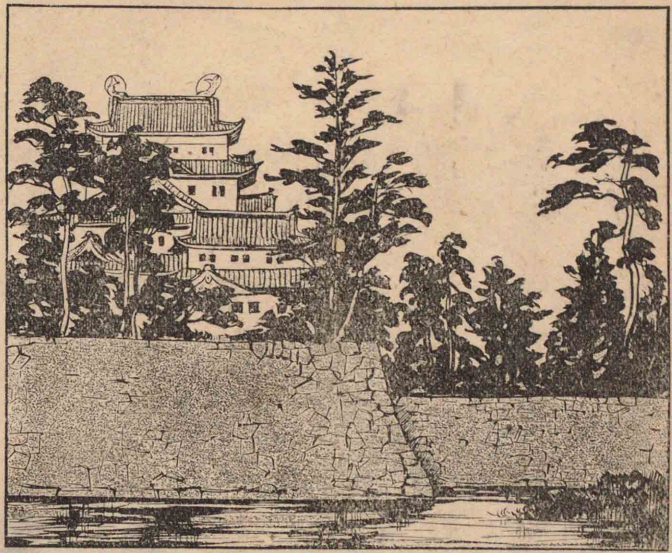
と、いつて、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、幾度も先生におじぎをした。さうしてみんな一しよに學校の門を出た。

第二十三 名古屋市

名古屋市ハ我が國屈指ノ大都會ニシテ、人口四十餘萬アリ。商工業盛ニシテ、燒物・塗物・扇・綿

指





此所ニ名高キ名古屋城  
 アリ。三百年前徳川家康  
 ガ諸大名ニ命ジテ造ラ  
 シメタルモノニシテ、其  
 ノ天守閣ハ加藤清正ノ  
 キヅキシ所ナリ。天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノ  
 シヤチホコアリ。其ノ高サハ尺五寸、朝日夕日

絲織物等ノ産出頗ル多

シ。

ニカゞヤキテ、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコ  
 トヲ得ベシ。名古屋市ハ此ノ城アルニヨリテ  
 名高ク、尾張名古屋ハ城デ持ツト歌ハレタリ。  
 市ノ南部ニ熱田神宮アリ。草薙劔ヲマツル。

第二十四 廣瀨中佐

とゞろく砲音、飛來る彈丸

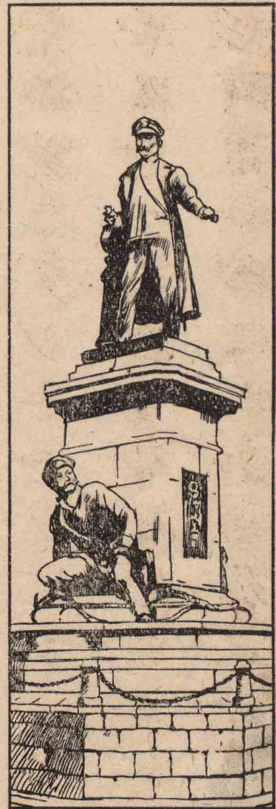
荒波洗ふデツキの上に、

やみをつらぬく中佐の叫。

「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」



度



船内くまなくたづぬる三度、  
呼べど答へずさがせど見えず、  
船は次第に波間に沈み、  
敵弾いよくあたりにしげし。  
今はとボートにうつれる中佐、

胃

坐

飛來る彈丸たまに忽ちうせて、  
旅順港外うらみぞ深き、  
軍神廣瀬と其の名残れど。

第二十五 胃とからだ

或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つ  
ていひますには、

僕等はふだんいそがしく働いてゐますの  
に、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少  
しも僕等の爲につくさない。僕等是一同申



給

し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。といひました。さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、目は食物を見ても、見ないふりをし、手は食物を口へ入れることを止め、足は食堂へ行くことを止めました。

かうして二三日たちますと、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、



若 養

顔の色も青くなつて来て、からだに全く力がなくなりました。此の時胃は一同に向つて言ひました。

「君等ばかりなることは知らなかつたのですか。僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。食つた物をこなして、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出来ませう。」



招

君等は僕を苦しめようとして、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。其の爲に新しい血が出来なくなつて、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。これは全く君等が自分で招いたのであります。今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたとい

互暮世

ひます。こんなわけですから、これから後は互に親しみ合つて暮しませう。世の中といふものは、すべて相持のものです。之を聞いて、手足等一同は、なるほどと感心したといひます。

第二十六 分業

マツチはちよつとした物で、價も安く、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらう



損

機械

か。  
 たとひ休まず働いても、一人で一日に一包は造れまい。かりに造れたとしても、それを十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。まうかるところか、非常な損になる。それではマツチは、どうして誰が造るのであらう。  
 マツチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それ〴〵手分をして働いてゐる。材木を機械にかけて軸木ぢくをこしらへてゐる者も

乾 藥 温 集

あり、軸木を火で乾かす者もあり、乾かした軸木の先に藥をつける者もあり、藥をつけた軸木を温室で乾かす者もあり、乾かしたのをそろへてマツチの箱に入れる者もあり、箱に入れたのを十づつ集めて包紙に包む者もある。すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をすることを分業といふ。  
 分業で造ると、其の出来がよ**い**ばかりでなく、出来高が**たい**そ**う**多くて、一人々々別々にな



比

つて造るのとは比べものにならない。したが  
 つて一包のマツチを十錢ぐらゐで賣つても、  
 さうおうにまうかるのである。  
 分業はマツチの製造ばかりではない。うちは  
 を造るにしても、時計を造るにしても、家を建  
 てるにしても、皆これによるのである。  
 分業で仕事をする時、誰か一人の手ぎはが悪  
 いと、全體の出来までも悪くなる。やはり世は  
 相持のものである。

誕

第二十七 人を招く手紙

一

来る十六日は私の誕生日で、ちやう  
 ど日曜日ですから、母が私に、お友だ  
 ちをお呼びなさい、おこはでもふか  
 して上げようと申します。お呼びす  
 るのは大てい近所の人で、あなたが  
 知つていらつしやる方ばかりです。  
 もし天氣がよかつたら、三郎さんを



連れて、お晝前にいらつしやい。面白  
いことをして遊びませう。

三月十二日

春子

松子様

二

来る二十五日に、亡母の三回忌の法  
事を致します。まことに御苦勞様で  
すが、どうか同日午前十時頃までに、  
お出でを願ひたうございます。

亡忌法

澤本

三月十二日

廣澤連太郎

杉本佐平太様

三

父が今年八十八になりましたので、  
来る二十五日に、お心やすい方にお  
出でを願つて、ほんの心ばかりの祝  
を致したいと存じます。同日午前十  
一時までに、どうぞ御來車を願ひま  
す。又まことに申しかねますが、當日



首

祝の歌を一首いたゞきたうござい  
ます。これは年よりからのお願いでこ  
ざいます。

三月十二日

小野田國男

澤 勝五郎様

第二十八 乃木大將の幼年時代

乃木大將は幼少の時、體が弱く、其の上臆病おくで  
あつた。幼名を無人なきてといつたが、寒いといつて  
は泣き、暑いといつては泣き、朝晩よく泣いた

體

小

對

ので、近所なきての人は大將のことを、無人ではない、  
泣人なきてだといつたといふことである。

大將の父は長府藩主ちやうふはんに仕へて、江戸で若君の  
お守役をしてゐたが、自分の子がかう弱虫の  
泣虫では、第一藩主に對しても申しわけがな  
い、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強く  
しなればならぬと思つた。

そこで大將が四五歳の時から、大將の父はう  
す暗い中に大將を起して、往復一里餘もある



墓 詣

高輪たかなはの泉岳寺せんがくじへよく連れて行つた。泉岳寺には名高い四十七士の墓がある。大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に參詣したのである。

或年の冬、大將が思はず寒いといつた。すると大將の父は



國八

浴 端

必 馴

よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。

といつて、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。大將はこれから後、一生の間「寒い」とも「暑い」ともいはなかつたといふ。

大將の母もまたえらい人であつた。大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將が馴れるまで、うち中の者がそれ



ばかり食べるやうにした。其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。

大將が十歳の年、大將の一家は郷里へ歸ることになつた。其の時大將は江戸から大阪まで、



馬やかごに乗らず、兩親と共に歩いて行つた。當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐた

熱 疊 魂 父下誠質素

のである。實に鐵は熱いうちにきたへなければならぬ。

郷里の家は六疊三疊二疊の三間と、二疊の板の間が一つだけの、至つてせまい、そまつな家であつた。けれども刀やり・槍なぎなた・薙刀など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。

此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰



がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。

をほり

國八

大正十三年四月三十日翻刻印刷

尋常小學國語讀本卷八

大正十三年六月二日翻刻發行

臨時定價金拾參錢

そ

著作權所有

著作兼  
發行者

文 部 省

翻刻發行  
兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者

石 川 正 作

印刷所

東京書籍株式會社工場

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

大正十三年五月七日  
文 部 省 檢 査 濟

發 賣 所

東京市麴町區飯田町一丁目三番地  
株式會社 國定教科書共同販賣所



吉校  
河原

慶次郎